

リハビリテーション（以下、リハ）医学の領域でも帰結の研究が重視されつつある。帰結は予後予測、プログラム評価、治療方法の比較検討などに利用され、根拠のある治療を行ううえで重要なものである。そこでリハ医学で比較的頻度が高く、帰結の研究が取り上げられている疾患について、帰結の研究がどのように進められているかを特集することにした。それぞれの専門分野の先生方がわかりやすくまとめて下さったので、興味ある特集となったと考えている。

■**プログラム評価は帰結研究の発展で精緻化する** 帰結とは、治療などの予知因子から影響を受けた結果であると定義し、種々の帰結の研究のデザインを示している。そのなかで、リハ医療では機能障害、能力低下、社会的不利などの障害モデルが帰結の研究としての関心事であることを指摘している。さらに、プログラム評価がリハ医療において非常に重要であるが、プログラムという複雑なものに対照群を置くことの倫理的難しさも強調している。そのうえで、帰結の研究がプログラム評価の精度を上げることを期待している。（千田富義氏、397 頁）

■**脳卒中では予測法の確立と維持的リハの帰結研究が重要** 脳卒中での帰結の研究が ADL の予後を規定する因子の研究から始まり、多変量解析の導入により発展してきたことを述べている。最近ではさらに統計学的手法の探求が進められ、帰結の研究結果が包括支払いシステムへの応用など多方面で利用されていることを指摘している。今後、脳卒中の帰結に関する予測法の確立、維持的リハ展開のための QOL を中心とした帰結研究が重要であることも強調している。脳卒中の帰結に関する種々の新しい指標の呈示もあり、非常に参考になる論文である。（山田 深氏、403 頁）

■**頭部外傷の認知障害、社会的行動障害などにリハ効果あり** 頭部外傷では身体運動機能障害、高次脳機能障害、生活自立度などの帰結が関心事であることを指摘して、厚生労働省が3年間で行った高次脳機能障害者支援モデル事業での帰結データを報告している。全国的データであり、非常に有用なまとめである。そのなかで、頭部外傷、高次脳機能障害をもつものでは、失語、失認、失行などの医学的帰結よりも認知障害や社会的行動障害などの改善が目立つような印象を述べている。さらに社会的サービスを組み入れた連続したサービス提供の重要性を強調している。（長岡正範氏、407 頁）

■**パーキンソン病のリハ効果を RCT 文献によって紹介** パーキンソン病におけるリハ帰結の研究について理学療法を中心にしながら、作業療法の寡動や振戦への効果、言語訓練によるプロソディ異常の改善、嚥下反射開始時間遅延の改善、呼吸の改善などを文献的に指摘している。とくに理学療法については8編の RCT の論文を吟味している。これまでの文献では、Hoehn & Yahr 分類のⅡ-Ⅲであり、より軽度・より重度例の検討をすることにより、軽度例の障害出現を遅延させる、重度例の廃用性変化を改善させるなどの課題が浮かび上がるとしている。（尾花正義氏、415 頁）

■**骨関節疾患では患者立脚型アウトカム研究が重要** これまで社会全体の健康状態、衛生状態などの客観的指標が帰結として関心を持たれていたが、最近、患者立脚型アウトカムが重要視されてきていることを強調している。そのため、個人の健康観や満足度などの患者側の主観的指標が注目を集めているとしている。そのうえで、腰椎椎間板ヘルニア、腰部脊柱管狭窄症、頸部神経根症、頸髄症、大腿骨頸部骨折その他に関する帰結の研究を呈示している。最後に、わが国での無作為化臨床試験による一層の知識の蓄積を期待して、論文を結んでいる。（赤居正美氏、423 頁）